

プノンペンの平日（１） ～カンボジア法整備支援の日常～

JICA長期派遣専門家

内山 淳

はじめに

「法整備支援」。

最近、知名度が高まっています。本稿をお読みの方には、もはやその活動内容を詳しく説明する必要はないでしょう。

「長期派遣専門家（現地専門家）」。

こちら、知名度が高まっていて、もはやその活動内容を詳しく説明する必要はないでしょう…とりたいところですが、そうでもなさそうです。

漏れ聞こえる声に耳を傾けると、長期派遣専門家の日常は、意外と知られていないようです。これまでも、カンボジアでの法整備支援の様子を長期派遣専門家が法律雑誌に寄稿した連載記事がありました¹。今でも多くの人々が読んでいて、私も、この記事に触発されて、法整備支援に興味を持った一人です。ただ、連載当初から約10年が経っていますので、カンボジアの状況も随分と変わっています。

そのような中で、私は、ICDからの依頼を受け、僭越ながら寄稿することになりました。『ローマの休日』のようなドラマティックな出来事で溢れているわけではないのですが、『プノンペンの平日』も捨てたものではありません。長期派遣専門家のささやかな日常をご紹介します。法整備支援の現場を少しでも実感してもらえたらありがたい限りです。

もし読者の皆さんからのご批判に耐えられれば、数回にわたり連載する予定です。

なお、本稿の中で意見にわたる部分は、専ら私見ですので、法務省やJICAの公式見解ではありません。また、本稿は、学術論文ではないため、くだけた表現が多く含まれていますが、予めご容赦ください。

【目次】

- 1 平日の朝
- 2 平日の午前
- 3 平日の昼休み（以上、本号）
- 4 平日の午後
- 5 平日の夜
- 6 平日の特別行事
- 7 番外編「プノンペンの休日」

¹ 「カンボジアの法の夜明けーキムセンへの手紙」（柴田紀子、『法律のひろば』2009年4月～2014年8月、ぎょうせい）

1 平日の朝

6:00 起きる

カンボジアの朝は早い。朝5時台には、ベッドに朝日が射し込み、屋外からは、運動する人の足音や出勤する車のエンジン音が響いてきます。

日本では夜型人間であった私も、カンボジアに来てから、少し早起きになりました。

8:00 出勤する

私の出勤時間は、午前8時頃。正確に言うと、午前8時過ぎ。正直に言うと、午前8時半。

私の住まいから職場までは、徒歩5分です。車道の喧騒を尻目に、考え事をしながら歩いていると、あっという間に到着します。幸い、プノンペン市内では珍しいのですが、歩道が整備されている区画であるため、歩きやすいです。逆に言えば、残念ながら、プノンペン市内の多くの地域は、歩道が十分には整備されていません。「歩道のあちらこちらで表面が陥没している」「駐車している車が歩道をふさいでいる」「突然バイクが歩道を走り抜けていく」「そもそも歩道がない」などの事情があって、ウォーキングには向かない場所ばかりです。

私の派遣先は、カンボジア司法省。首都プノンペンの中心部にあり、王宮の目の前に位置します。日本の法務省も、首都東京の中心部にあり、皇居の目の前に位置します。法を主管する省庁がこのような場所に配置されているのは、法治国家であることを明らかにするためとも言われています。

私の職場であるJICAプロジェクト・オフィスは、司法省内の別館2階の一室です。この別館は、日本の支援で2008年に建設されました。



【司法省別館】



【プロジェクトオフィス】

オフィスの扉を開けると、すでに出勤しているスタッフがこちらを向いてくれます。私が「おはようございます！」と一声かけると、スタッフも口々に「オハヨウゴザイマス！」とあいさつしてくれます。

私は、これを「オハヨウゴザイマス・プロジェクト」と勝手に名付けました。

オフィスには、合計6名のスタッフがいます。その内訳は、日本語・クメール語スタッフ3名、英語・クメール語スタッフ2名、事務担当スタッフ1名です。いずれもカンボジアの人た

ちなので、共通言語はクメール語になります。そのため、最初の頃は、私も「スオスダイ！」（クメール語の挨拶）と言ったり、日本語・クメール語スタッフには「おはようございます！」、英語・クメール語スタッフには「グッドモーニング！」と言ったりしていました。

しかし、何となく一体感が出ないので、英語・クメール語スタッフに「オハヨウゴザイマス」という挨拶だけを教えて、使ってもらうことにしました。

今では、英語・クメール語スタッフが自主的に覚えたらしく、「スママセン」などの言葉も使い始めていて、日本語に興味を持ってもらえたようです。

複数の言語が飛び交うオフィスですが、日本語を理解するスタッフが多いので、私は、つい母語の日本語で話してしまいます。ときには冗談を言って、スタッフを笑わせますが、ふと視線を移すと、日本語を解しないスタッフの困った顔が見えます。

日本語、英語、クメール語。オフィス内で、どのようなときに、どの言語を使うのかについて、最近では、気を付けるようにしています。長期派遣専門家の仕事の1つは、オフィス内の人間関係を円滑にすることですから。

2 平日の午前

9:00 メールする

私の場合、出勤して最初にするのは、パソコンでのメールの確認。

カンボジアは、日本との時差がマイナス2時間なので、出勤時間の午前8時台でも、日本はすでに午前10時台。そのため、出勤した頃には、すでにあちらこちらからメールが届いています。

カンボジア時間の午前10時から午前11時までは、日本の昼休み。

カンボジア時間の正午から午後2時までは、プロジェクト・オフィスの昼休み。

つまり、出勤してしばらくすると、日本が昼休みになり、日本の昼休みが終わると、すぐにカンボジアが昼休みになり、カンボジアの昼休みが終わると、もう日本は夕方になります。この時差は、意外と侮れません。

朝一番で前日からの懸案事項に対応していると、気付いたときには「あっ、もう日本は昼休みだ。」ということもしばしば。

意外と侮れないと言えば、ネット環境です。

カンボジアでは、街中にたくさんあるカフェやレストランなどに行けば、ほとんどのところで無料でWi-Fiを使えますので、日本に比べて、とても便利です。

しかし、電波状況はあまり良くありません。オフィスでは、インターネットやサーバーに接続するために、Wi-Fiを利用しているのですが、毎日のように、一時的に接続できなくなります。メールを送れず、サーバーに保存しているファイルを利用できず、いつ復旧するのかと思ひながら、ただ待つのみです。

日本なら、イライラしながら担当部署に連絡して、至急直してほしいと不満をぶつけるかもしれませんが、ここはカンボジア。長期派遣専門家には、忍耐と諦観が必要なときがあります。

10:00 回答する

過去のプロジェクトのメンバーを含むカンボジアの法曹から、プロジェクトのスタッフを通じて長期派遣専門家に質問がよく届きます。たいていは、SNSで連絡がきます。ときには、オフィスに来てもらい、直接、質問を受けることもあります。

スタッフは、クメール語で届く質問を素早く日本語に翻訳し、それを受け取った長期派遣専門家が、日本の実務や文献を参考にしながら迅速に回答します。幸い、オフィス内には、少し版が古いものもありますが、日本の法律専門書が一通り揃っています。

質問への回答が遅くなれば、同じ回答内容でも「鮮度」が落ちてしまいます。しかし、鮮度抜群でも不正確ではいけません。

また、実務上直面している問題に由来する質問が多いので、単に論理的な結論だけを示しても満足してもらえません。カンボジアの実務や社会的な実情を踏まえる必要があります。そして、回答するときには、考え方の道筋を示す必要もあります。答えだけを教えたのでは、単なる便利屋になってしまうからです。

さらに、どこまで詳しく説明すべきかについても意識しないとイケません。回答には、正確さと分かりやすさのバランスが重要です。ですから、日本語で詳しく解説された本を見つけても、それを翻訳して渡せばいいということになりません。長期派遣専門家が分かりやすい言い回しに直す必要があります。ここは腕の見せ所です。おそらく、分かりやすい日本語で言い換えられない概念は、クメール語に翻訳しても、その意味が正確には伝わらないでしょう。ときには、クメール語の訳語をスタッフに教えてもらいながら、言葉のニュアンスや意味がきちんと伝わるかどうかを検討しています。

法整備支援では、「言葉」がとても重要です。

11:00 話し合う

オフィスには、長期派遣専門家として、検事、裁判官出身者、弁護士が各1名いるほか、プロジェクトの調整役である業務調整員がいます。スタッフからは、「法廷があれば、いつでも刑事裁判ができますね。」と冗談を言われたりします。

長期派遣専門家は、個室ではなく、スタッフと一緒に大きな部屋で働いています。それぞれの長期派遣専門家の席も隣同士ですので、いつもいろんなことを話し合っています。週末の予定やおいしいレストランの情報など…もちろん、プロジェクトのことも話し合っています。直面する問題や今後の方針などを4人で話し合っていると、新しいアイデアが浮かんだりします。三人寄れば文殊の知恵…いや、四人寄れば文殊の知恵です。

話し合うのは、何も長期派遣専門家同士ばかりではありません。スタッフとのミーティングを開催して、情報共有したり、日頃の困り事を聞いたりしています。

また、必要があれば、カウンターパートやワーキンググループのメンバー、カンボジアの法曹とも話し合います。

日本人同士でも、それぞれ経歴が異なります。カンボジアの人たちとは、言葉も文化も違います。ですから、長期派遣専門家にとっては、人と人とのコミュニケーションがとても重要で

す。

人間関係がうまくいけば、プロジェクト活動もうまくいきます。矛盾しているように聞こえるかもしれませんが、法整備支援の鍵は、「法律」ではなく、「人」です。

3 平日の昼休み

12:00 食べる

オフィスの昼休みは、正午から午後2時までの2時間。日本より長いのは、魅力的です。おかげで、ゆっくりと食事しても、その後に少しばかり昼寝ができます。スタッフも、オフィス内のいすを並べた即席ベッドで、器用に寝ています。

昼休みには、親睦を深めるイベントを行うことがあります。仕事の後に大学院などへ通っているスタッフも多いため、夕食ではなく、昼食を利用しています。

例えば、月1回、「スタッフ・ランチ会」と称して、長期派遣専門家とスタッフが一緒に昼ごはんを食べています。お店は、スタッフに一任です。あの店がいい、この店に行きたいと言って、ひとしきり盛り上がります。結局、肉料理のお店になることが多いですが、今のところ、私の懐が寒くなるような高級店ではないので、ホッとしています。

また、毎週1回、「水曜ランチ会」と称して、長期派遣専門家だけで昼ごはんを食べています。新規オープンのお店、ディナーは高いけどランチはリーズナブルなお店などなど、そのときの気分で決めています。プノンペンには、予想以上に各国の料理店があります。日本、フランス、イタリア、中国、韓国、インドは言うに及ばず、東南アジア各国（ベトナム、タイ、インドネシア、ミャンマー）を始め、スペイン、メキシコ、ネパール、レバノン、モロッコ、エチオピア……。いずれも日本より値段が安く、ボリュームがある上、味も本格的です。ちょっとした世界旅行の気分です。

さらに、不定期ですが、スタッフや長期派遣専門家の誕生日には、ケーキを買ってみんなでお祝いをしています。少し残念なのは、プノンペンには、まだまだケーキ屋さんは少なく、ため息が漏れるほどおいしい味には、なかなか出会えません。甘党の私としては、「ため息」を求めて、引き続き、プノンペンを探検中です。



【スタッフ・ランチ会】

さて、今回は、「平日の昼休み」までをお伝えしましたが、いかがだったでしょうか？
私たちの日常の空気感が伝わったとしたら何よりです。

次回は、「平日の午後」からです。また、全国の始審裁判所の実情調査、現地でのセミナー、インターンシップの受入れなど、少し硬派な「平日の特別行事」もお伝えする予定です。
どうぞお楽しみに。

(つづく)

プノンペンの平日（２）～カンボジア法整備支援の日常～

JICA長期派遣専門家

内山 淳

【目次】

- 1 平日の朝
- 2 平日の午前
- 3 平日の昼休み（以上、前号）
- 4 平日の午後
- 5 平日の夜（以上、本号）
- 6 平日の特別行事
- 7 番外編「プノンペンの休日」

前回は、「平日の昼休み」までお伝えしました。今回は、「平日の午後」からの様子です。平日の午後と言えば、昼食で膨らんだお腹の影響で、まどろみがちな時間帯ですが、本稿の影響で、読者の皆さんが睡魔に襲われないことを祈るばかりです。

4 平日の午後

14:00 開催する

プロジェクトの重要な活動は、ワーキング・グループ（WG）です。

WGでは、プロジェクトの目的を実現するため、様々なことを議論します。WGの活動は、そのままプロジェクトの成果につながります。

WGは、カンボジアの裁判官、検察官、弁護士、大学教授などによる混成メンバーです。そうすることで、職業別の垣根を越えた交流ができることを期待しています。

新プロジェクトでは、WGの活動がまだ開始していないので、ここからは、前プロジェクトでのWGについてご紹介します。

私が担当していたのは、裁判官と検察官で構成されたWGでした。WGのメンバーは、裁判官検察官養成校で教官も務めていました。当時は、現在と違って、弁護士との混成ではありません。また、当時は、プロジェクト・オフィスの会議室だけでなく、その養成校の教室などでもWGを開催していました。

毎週1回。平日の午後。夕方までの数時間がWGの時間です。

WGのメンバーは、それぞれ担当する裁判期日などを調整して参加します。もちろん、日本側からの手当は、一切ありません。ですから、熱意がなければ続けられません。

WGでは、民法や民事訴訟法の解釈、日頃の実務で直面する問題点などについても議論します。カンボジアの民法と民事訴訟法は、日本が支援したため、その内容は日本法とよく似ています。しかし、カンボジアは、日本と社会や文化が違いますので、日本では想定しないような実務上の問題が発生します¹。

WGのメンバーは、お互いに意見を交わし、長期派遣専門家（現地専門家）にコメントや解説を求めます。しかし、私たち現地専門家も、日本法の全てに精通しているわけではありませんので、ときには、即答せずに持ち帰って調べることもあります。

以前、私は、メンバーに「現地専門家に求めるものは何ですか？日本法についての深い知識？質問に即答してくれる豊かな経験？」などと雑談ついでに聞いたことがあります。

さて、どんな答えだったと思いますか？

共通していたのは、「知識や経験があることはありがたい。でも、一番求めているのは、一緒に考えてくれること。それから、カンボジアの法律家は、日本語で書かれた本を調べることはできない。日本には、たくさんの蓄積があると思う。それを調べて、考え方を教えてくれるとありがたい。」ということでした。

民事法の専門家ではない私への気遣いが半分ほど含まれているとしても、そのような答えが返ってきたのは、驚きでした。考えてみれば当然のことかもしれませんが、どうやら「万能の巨人」を求めているわけではないようです。

カンボジア法については、カンボジアの法律家の方が知識や実務経験は多いはずですが、それだけでは直面した実務上の問題を解決できません。必要なのは、法的な思考です。「リーガル・マインド」などとも呼ばれます。

失礼ながら、この法的な思考の点では、たとえ民事法の専門家でなくても、日本の法律家の方がまだ圧倒的に優位な立場にいます。

しかし、「ウサギとカメ」の逸話が教えるように、安穩としてはられません。

例えば、WGで議論していても、メンバーは、決して、日本法の解釈を鵜呑みにしたり、無批判に追従したりしません。「なぜ、そう考えるのか。」と質問してくることがよくあります。そのとき、法的な思考過程を示すと、納得してくれることが多いです。

カンボジアの法律家全体からすれば、WGに参加できる人数はごくわずかですが、おそらく、今後、カンボジア司法の中枢を担う人たちです。クメール・ルージュ時代に多くの法律家を失った国ですが、WGを通じて、着実に人材が育っています。少し上から目線の言い方で恐縮ですが、本当にそう実感します。私たちには、木陰で昼寝をしている暇はなさそうです。

ただ、これまでのしがらみや因習を打ち破るのは、並大抵のことではありません。WGに参加している素晴らしい人材が、その力量を存分に発揮できる時代が来るまでには、もう少し辛抱が必要そうです。

¹ 詳しい法律的議論については、「カンボジアの司法」シリーズ（『ICDNEWS』2017年6月号以降）参照。

さて、WGは、法整備支援の日常の中でとても重要な1コマですので、思わず、しゃべり過ぎてしまいました。引き続き、WGがない日の午後もご紹介します。



【ワーキング・グループ活動】

15:00 出席する

相談したいことがあるときには、日本とテレビ会議をすることがあります。画像の乱れは多少ありますが、特派員のニュース中継のように、音声が届くまでの微妙な間はありません。

余談ですが、カンボジアに来てから、携帯電話に入っているアプリで、日本にいる家族とテレビ電話をするようになりました。意外だと思われるかもしれませんが、首都プノンペンでは、カフェやホテルに限らず、多くのローカル食堂でも、無料のWi-Fiを利用できます。たいていのカフェでは、グループのお客さんでも、それぞれ自分の携帯電話に没頭して、指先を画面上に走らせています。この姿は、どうやら世界共通のようです。

さて、話をテレビ会議に戻します。会議の相手は、日本にいるJICAやICDの皆さんです。カンボジアまでは、成田からの直行便が就航していますが、やはり遠路ですので、テレビ会議で協議するのが効率的です。

もちろん、メールや電話でも連絡を取り合っていますが、テレビ画面越しとはいえ、やはり顔を合わせた方が、議論が深まるように思います。そして、「議論」だけでなく、オール日本での支援という「絆」も深まるかもしれません。

16:00 書く

日本に送る報告書や『ICDNEWS』の原稿などを書くのも大切な仕事です。

缶ビール片手にこの原稿を書いているとお思いの方が多いかもしれませんが、実は、そんなことはないんです。締切りを迫る編集者はいませんが、より多くの人に法整備支援を知ってもらうため、日夜、推敲を重ねております。

法整備支援では、「発信」が大切です。世界中で、様々な国や団体が、多様な支援活動をしています。ですから、せっかく日本が素晴らしい活動をしているのに、発信しないと埋も

れてしまいます。カンボジアで有名なアンコール・ワット遺跡群は、今でこそ世界遺産として有名ですが、発掘されるまでの長い間、深い森の中に埋もれていたそうです。後世の歴史家による発掘を待つのも悪くはないですが、やはり法整備支援については、「発掘」ではなく「発信」が向いています。

「Rule of law！（法の支配を！）」「Access to justice！（司法へのアクセスを！）」と声高に叫ぶのは少々気が引けますが、「以前、カンボジアの民法や民事訴訟法を作る手伝いをしまして、今も、その普及や人材育成の手伝いをしているんですよ。手前味噌で申し訳ないですが、カンボジアの法律家にはかなり好評でして・・・。」と奥ゆかしくアピールするくらいは、許されるのではないかと思います。

17:00 読む

スタッフは、終業時間の午後5時になると帰り支度を始めます。残業するスタッフは、ほとんどいません。多くが20代半ばで、仕事の後、大学院や語学教室などに通って、自己研鑽に努めています。

そんなスタッフたちに触発されたわけではありませんが、私も独りになれる時間を大切にしています。スタッフが帰った後は、オフィスも静まりかえるので、独りでじっくり考えたり、新聞や本を読んで情報を収集したりするには、ちょうどいい環境です。

また、日本語に翻訳されたカンボジア法令の翻訳チェックをすることもあります。チェック後は、ICDのホームページ²に掲載しています。日本の法律との違いに注目して読むと、無味乾燥な条文も、なかなか味わい深いものです。



【地元の英字新聞（2紙）】

² 随時更新。約60法令を掲載（2017年12月現在）。
http://www.moj.go.jp/housouken/houso_houkoku_cambo.html

5 平日の夜

20:00 帰宅する

働き方改革が叫ばれる昨今、もっと早く帰るべきなのかもしれませんが、これでも検察の現場にいた頃に比べると、「夢の超特急」と呼べるくらい早く帰宅できます。

帰宅後は、缶ビール片手にテレビ…ではなく、ちょっとばかりクメール語（カンボジア語）を自習。

首都プノンペンでは、ホテルやレストランなど外国人が多い場所であれば、英語が通じることが多いです。しかし、クメール語を使えると、トゥクトゥク³に乗るときの値段交渉では、値引率が圧倒的に違います。ホテルや訪問先での挨拶では、笑顔率が圧倒的に違います。

そんな打算的な発想もあって、クメール語を学んでいます。日本で買ったテキストや辞書だけでなく、携帯電話に翻訳アプリをダウンロードして、ちょっと気になったら意味を調べてみます。また、ネット上の語学講座やカラオケなどの動画も利用しています。カラオケ形式だと、クメール語の文字が字幕になっている上、音に合わせて文字の色が変わるので、どこを歌っているのかが分かります。単語の発音を知るには好都合なのです。

クメール語は、マイナーな言語というイメージが強いですが、案外、学ぶための素材は溢れています。

覚えた単語は、スタッフ、WGのメンバー、ホテルの従業員との会話で実践練習。今まで意味のない音の「羅列」だったものが、あるとき意味のある音の「つながり」として聞こえてきたときの感動は、やみつきになります。この感動への依存性の高さは、薬物事件の比ではありません。おっと、不謹慎でした。

とは言え、私のクメール語は、まだまだ発展途上です。法整備支援と同じく、息の長い支援が必要そうです。



【クメール語の文字教材と辞書】

³ バイクの後ろに乗車用の台車が付いた乗物。

24:00 寝る

私は、単身赴任なので、夜は、気兼ねなく、ベッドにゴロ寝ができます。

カンボジアは、一年中、暑いため、湯冷めしないように素早く布団に潜り込むなどという状況にはなりません。

その代わり、雨季の終わり頃になると、真夜中でも、雷雨。ゴロゴロ、ドカーン。雨が止んで静かになると、暗闇の中で、かすかな羽音。プ〜ン。寝付けずに、部屋の電気をつけると、壁面に、ヤモリ！

決して安宿に泊まっているわけではないのですが、暑さだけではない寝苦しい夜が続きます。

そろそろ、夜も更けてきました。片手に持った缶ビールの酔いが回ってきましたので（！？），筆を置くことにします。おやすみなさい。



【ヤモリ】

さて、今回は、「平日の夜」までをお伝えしましたが、いかがだったでしょうか？

私たちの日常を追体験していただけたとしたらうれしい限りです。

次回以降は、全国始審裁判所の実情調査、現地でのセミナー、インターンシップの受入れなど「平日の特別行事」の様子をお伝えする予定です。また、番外編として、私たちのプノンペンでの日常生活を「プノンペンの休日」と題してお伝えします。

どうぞお楽しみに。

(つづく)

プノンペンの平日（3） カンボジア法整備支援の日常

JICA長期派遣専門家

内山 淳

【目次】

- 1 平日の朝
- 2 平日の午前
- 3 平日の昼休み（以上，前々号）
- 4 平日の午後
- 5 平日の夜（以上，前号）
- 6 平日の特別行事
 - （1）プノンペンにて（以上，本号）
 - （2）プノンペンを離れて
- 7 番外編「プノンペンの休日」

前回までは、「普通の平日」をお伝えしました。今回は、「特別な平日」の様子です。法整備支援の日常には、スパイスになるような特別行事が不定期にやってきます。長期派遣専門家は、その時々に応じて、様々な役割を演じますが、それらは知られざる一面かもしれません。一人二役、…いや、三役、四役の姿を御覧ください。

6 平日の特別行事

（1）プノンペンにて

企画する

長期派遣専門家は、ときに「プロデューサー」になります。

プロジェクトでは、日常のワーキング・グループだけでなく、より多くのカンボジアの法律家に知識や経験を共有してもらうため、不定期に各種セミナー¹を開催します。プロジェクトの波及効果が期待できる特別行事です。

長期派遣専門家は、セミナーの開催時期、場所、テーマ、当日の進行などについて考え、カンボジア側と協議しながら、よりよいセミナーとなるように工夫します。

セミナーの表舞台で活躍するのは、日本から来てくれる講師陣、それを支えるのは、通訳と翻訳を担当するプロジェクト・スタッフです。

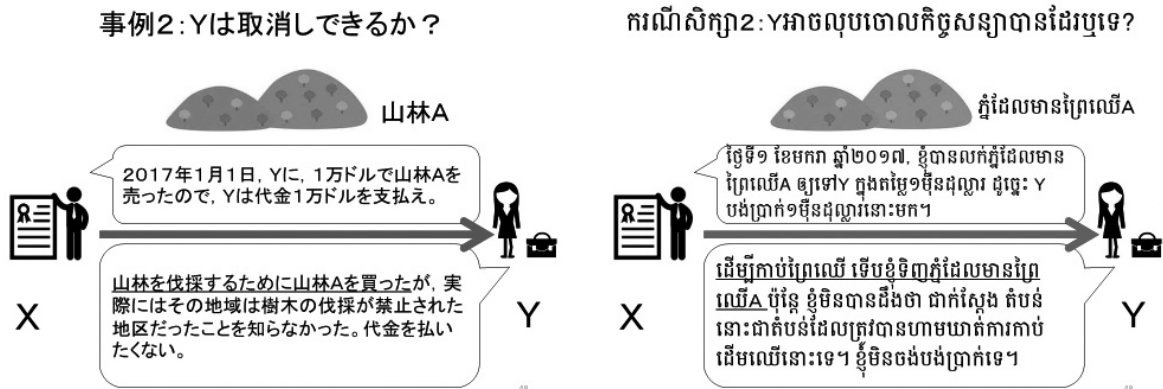
講師陣は、主にICD教官や日本の弁護士、大学教授です。講義では、カンボジアの法律を解説したり、カンボジアの実務で問題となっている事柄を取り上げて検討したりします。

¹ 過去の現地セミナー（一部）の様子は、ICDのホームページ参照。
http://www.moj.go.jp/housouken/houso_houkoku_cambo.html

ここで重要なのは、準備です。

まず、講義資料です。長期派遣専門家は、日本にいる講師とメール等で連絡を取りながら、当日使う講義資料を検討しますが、通常は、映写できるスライド（パワーポイント）形式の資料にしてもらいます。そうすれば、図やイラストを盛り込んで、視覚的に分かりやすくできるからです。また、日本語をクメール語に翻訳すると、性質上、文字量がかなり多くなるため、スライド1枚にどのくらいの情報量を盛り込むかなどを吟味する必要もあります。

コンサートやライブなどでは、本番のステージで観客に満足してもらうために、様々な工夫をするようですが、セミナーも同じかもしれません。講師陣の知識と経験を参加者に分かりやすく伝え、一人でも多くの参加者に満足して帰ってもらうためには、様々な工夫が必要な気がします。ちょっと過保護かもしれませんが。



【セミナーで使うスライドの例（同じページの日本語版とクメール語版）²】

準備としては、通訳も重要です。セミナーでは、カンボジア語（クメール語）の通訳が必要ですが、通訳人が理解できない言い回しは、絶対に参加者にも理解できません。ですから、事前に講師と通訳人が打合せをして、講義内容を最終確認します。ぶっつけ本番は禁物です。

ちなみに、通訳では、話し手の側がいろいろと気を付けた方がいい点があります。

例えば、日本語独特（？）の曖昧な表現は要注意です。例えば、「そのように解釈する余地がないわけではないと言えるかもしれません。」などです。セミナーでは、つい玉虫色の答えをしたくなるような質問が出ることがあります。しかし、通訳人としては、「結局、そのように解釈できるの？できないの？」とツッコミを入れたいのかもしれません。

その他にも、「急がば回れ」、「一期一会」などの慣用的な表現も気を付けたいといけません。初めて聞いた通訳人の頭の中には、「どこを回る？」「苺？一語？」などの疑問

² 日本語版は、福岡文恵 ICD 教官作成。クメール語版は、プロジェクト・スタッフが翻訳。

が渦巻くかもしれません。日本語として洗練された表現は、必ずしも通訳に適しているとは言えないようです。

まだまだいろんな「通訳あるある」が存在しますが、それだけで今号の紙面を埋め尽くしてしまいそうなので、割愛したいと思います。³

さて、話を戻して、「準備」についてです。日本側は、いつも入念過ぎるほどの準備をしますが、カンボジア側とはかなりの温度差があります。ちょうど日本とカンボジアの気温差くらいでしょうか。

そもそも数か月先の予定を決める習慣がないのか、直前まで決まらないハラハラ感が好きなのか、時間の流れがメコン川のように悠長なのか、正確な理由は分かりませんが、カンボジア側との調整では、予定がなかなか確定しないことがしばしば。

ただ、逆に言うと、直前になっても柔軟に予定を変更してくれることがあるので、急遽、関係者と会えたり、施設見学ができたり、資料をもらえたりして、想定外の喜びを味わえることもあります。事前の不安が杞憂であったかのように、結果的には、うまくいったということも多いです。

確かに、「終わりよければ、全てよし。」と言いますが、やはり準備万端で臨み、「備えあれば、憂いなし。」を实践したいところです。

講義する

長期派遣専門家は、ときに「臨時講師」になります。

カンボジアの裁判所やカンボジアの弁護士による自主セミナーなどから、講師をしてほしいと頼まれることがあります。先ほどのプロデューサーとは別に、自ら主演を務めるセミナーもあるわけです。これも、プロジェクトの波及効果が期待できる特別行事です。

日本が支援したカンボジアの民法や民事訴訟法には、カンボジアであまり知られていない用語や概念が数多く盛り込まれています。また、日本と異なり、現在でも、カンボジアには法律の注釈書はほとんどありませんし、ましてや法律を初めて学ぶ人にとって分かりやすいような解説本などは皆無です。ですから、カンボジアの法律家が民法や民事訴訟法の講義を担当するのは、なかなか大変なのが現状です。

そこで、長期派遣専門家が、カンボジアの民法や民事訴訟法について、条文の内容や趣旨、実務上の問題に関する解決策などを説明するセミナーを開催する需要が生まれます。

これは、いわば「アフターサービス」に近いかもしれません。日本は、起草当時、最先端の民法や民事訴訟法という「製品」をカンボジアに提供しました。その際、条文ごとの意味を解説する「取扱説明書」も提供しました。しかし、やはりそれだけでは足りませんでした。そこで、現在では、長期派遣専門家を常駐させる「アフターサービス」

³ 通訳については、「通訳人を介して話をするときの留意点」(辻保彦、『ICDNEWS』69号)が興味深い。デジタル版は、http://www.moj.go.jp/housouken/housouken05_00067.htmlに掲載されている。

を提供しています。

しかし、アフターサービスは、永久保証ではありません。アフターサービスがなくても、「製品」を使いこなしてもらおう。それが法整備支援の最終目標です。

ちなみに、セミナーでの資料ですが、クメール語版の講義資料は、JICAのホームページ⁴等に掲載するため、参加できなかった多くのカンボジアの法律家も入手できます。将来的には、このような資料を活用してもらい、カンボジアの法律家自身で講義をして、それを聞いた法律家が、更に講義して…というように「人材育成の輪」が広がっていくと嬉しい限りです。

ところで、カンボジアで講義をすると、必ず感じる日本との違いがありますが、何か分かりますか？

…そう、「質問」です。

セミナーの参加者からは、たくさんの質問が出ます。日本のように、参加者が会場の空気を読んで、予定の終了時刻が近づいたら質問をやめるようなことは、まずあり得ません。

日本なら、1時間の講義であれば、せいぜい5分程度の質疑応答で十分。10分あれば文句なし。それ以上の時間だと、質問する人がいなくなって司会者が困るかもしれません。

しかし、カンボジアでは、心配無用。1時間の講義であれば、30分は質疑応答になるでしょう。終了時間や会場の空気などは気にしません。誰かが止めない限り、次々に質問する人の手が挙がります。参加者のアンケートには、いつも必ず「もっと質問の時間があれば良かった。」という回答があります。質問時間を30分以上(!)確保していてもです。

他方で、実は、長期派遣専門家にとっても、質疑応答の時間は貴重です。質問を聞けば、カンボジアの法律家がどこまで理解しているか、どのようなこと考えているのか、どのような問題に直面しているのかなどが手に取るようになります。カンボジアの司法の実情を把握するための重要な機会です。

育成する

長期派遣専門家は、ときに「コーチ」になります。

プロジェクトでは、毎年、インターンシップ生を受け入れています。特に、カンボジア日本法教育研究センター(CJL)⁵の大学3年生は、毎年、定期的にインターンシップ生として、プロジェクト・オフィスに来てくれます。将来の活躍を期待する特別行事

⁴ プロジェクト(Phase 5)のホームページには、プロジェクトの概要やセミナー資料等を掲載。

日本語版 <https://www.jica.go.jp/project/cambodia/025/index.html>

英語版 <https://www.jica.go.jp/project/english/cambodia/025/index.html>

⁵ Research and Education Center for Japanese Law in Cambodia の略称。名古屋大学法政国際教育協力研究センター(CALE)がアジア各国に展開する研究教育拠点の1つ。詳しくは、ホームページを参照。
http://cale.law.nagoya-u.ac.jp/index_eng.html

です。

C J Lの学生は、プノンペン市内にある王立法律経済大学に在籍していて、C J Lでの勉強は、その大学の通常授業（本科）とは別で、あくまでも課外の活動という位置付けになっています。

C J Lの学生は、日本語で日本法（民法等）を勉強しています。大学生になってから日本語を学び始めた人ばかりですが、わずか数年で、日常会話はもちろん、漢字が交じる文章の読み書きもできるようになり、基本的な法律用語も知っています。その語学力には目を見張るものがあります。

実は、プロジェクト・オフィスでは、優秀なC J Lの卒業生がスタッフとして働いています。いずれも、かつては、プロジェクト・オフィスのインターンシップ生でした。これまでスタッフとして採用したC J Lの卒業生は、いずれも留学試験に合格して退職し、日本の大学や大学院に留学しています。現在のスタッフのうちの1人は、日本で修士号を取得し、カンボジアに戻ってきたという経歴の持ち主です。

カンボジアの大学生の中には、英語やフランス語を学ぶ人が非常に多く、家系の影響で中国語やベトナム語を話す人もかなりいます。他方、日本語の翻訳や通訳ができる人材は少なく、法律に精通しているという条件を付けると、更に限定されます。

しかし、カンボジアの民法と民事訴訟法は、日本が支援しましたので、日本法の内容や用語が分かる人材がいると、プロジェクトにとっても、カンボジアにとっても非常にありがたいわけです。個人的には、将来、「C J Lを卒業→プロジェクト・オフィスに就職→日本へ留学→カンボジアに帰国→法律職に従事」という人材育成の流れができることを願っています。

もっとも、私たち長期派遣専門家は、インターンシップ生のために何か特別な指導をしているわけではなく、ただ単に、いつもどおりの姿を見せているだけです。

「俺の背中を見て学べ。」と職人氣質なことを言うつもりはありませんが、取り繕って良く見せようとしても、結局はボロが出るだけなので、自然体で、ありのままの「背中」を見てもらうことを心掛けています。



【インターンシップの皆さん（工作中）】



【インターンシップの皆さん（休憩中）】

広報する

長期派遣専門家は、ときに「広報官」になります。

例えば、プノンペン市内の大学の教授からの依頼で、授業の1コマを使って、法整備支援について紹介する機会がありました。プロジェクトを知ってもらうための貴重な特別行事です。

今お読みの『ICDNEWS』を始めとする「文字」による発信も大切ですが、直接会って話しかける「言葉」による発信も忘れないように心掛けています。

まだまだカンボジアでの日本の法整備支援は、一般への知名度が低いです。「日本は、橋や道路を造ってくれた。」と言って、好意的に接してくれる人々にはよく出会います。しかし、「日本は、民法や民事訴訟法を作ってくれた。」と言って、好意的に接してくれる人々にはほとんど出会いません。

法律も、橋や道路と同じで、社会の重要な基盤です。ただ、法整備支援は成果が見えにくいので、忘れられてしまわないように、大学生を始めとする次世代への広報も重要になります。



【大学での広報（業務調整専門家の川口さん）】

出席する

長期派遣専門家は、ときに「外交官」になります。

法整備支援は、国際的な情勢やカンボジアの国内情勢と無縁ではありません。ですか

ら、長期派遣専門家は、各種会合に出席して、人脈の拡大、情報の収集などに努めます。語学力やコミュニケーション能力が求められるドキドキの特別行事です。

各国の支援機関（ドナー）とカンボジアの担当省庁等が集まる会議に出席することがあります。カンボジアのドナーがどのような分野に興味があるのか、どのような活動をしているのか、カンボジア政府がどのような方針なのか、どのような支援に興味があるのかなどについて、アンテナを張り巡らせます。

他方で、公式な会合とは別に、日本への留学経験者が集まる同窓会などのイベントに参加して、親日派や知日派と知り合って、本音を聞くこともあります。お酒を飲みながら話していると、つつい相手も饒舌になります。こんなときにも、覚えてたのクメール語が多少なりとも役に立ちます。私には、諜報員になるほどのしたたかさも語学力もありませんが、あちらこちらの会合に顔を出すと、オフィスには分からないカンボジアの実情をいろいろと知ることができます。

歓迎する

長期派遣専門家は、ときに「調整役」になります。

日本からは、不定期に、法務省や弁護士、大学教授などのプロジェクト関係者の皆さんがカンボジアを公式に訪問してくれます。数か月に1回くらいですが、少し緊張する特別行事です。

一度、現地を直接見てもらえば、何百ページもの報告書に匹敵するような情報を得ることができます。百聞は一見に如かずです（こういう慣用表現も通訳人泣かせですが）。

訪問してくれる皆さんの要望に合わせて、関係機関との会合や関連施設の訪問等を調整するのも長期派遣専門家の重要な仕事です。

近くて遠いカンボジア。間違った情報が独り歩きしないようにするためにも、多くの人に現地に来てもらい、実際に見聞してもらえるのは、長期派遣専門家にとって、とてもありがたいことです。

訪問してくれる皆さんの滞在期間の長短はそれぞれですが、来たときと帰るときとを比べると、皆さんの顔つきが違うように感じます。私には、「想像していた以上に、興味深い国だ。また来てみたいな。」と、帰路につく皆さんの顔に書いてあるように見えます。

まだカンボジアを訪れたことがない皆さん、プノンペンでお待ちしています。

さて、今回は、プノンペンでの「特別な平日」をお伝えしましたが、いかがだったでしょうか？

次回も、「特別な平日」ですが、たまにはプノンペンを離れてみようと思います。どうぞお楽しみに。

(つづく)

プノンペンの平日（４） ～カンボジア法整備支援の日常～

JICA長期派遣専門家

内山 淳

【目次】

- 1 平日の朝
- 2 平日の午前
- 3 平日の昼休み（以上，2017年12月号）
- 4 平日の午後
- 5 平日の夜（以上，2018年3月号）
- 6 平日の特別行事
 - （１）プノンペンにて（以上，2018年6月号）
 - （２）プノンペンを離れて（以上，本号）
- 7 番外編「プノンペンの休日」

前回は、プノンペンでの「特別な平日」をお伝えしました。今回は、同じく「特別な平日」の様子ですが、少しプノンペンを離れてみたいと思います。法整備支援の非日常は、別世界です。最初は躊躇してしまうことがあっても、最後には病みつきになることがありますので、ご注意ください。

6 平日の特別行事

（２）プノンペンを離れて

地方に行く

プロジェクトの活動は、基本的に、プノンペンで行いますので、仕事上で他の州に行く機会はほとんどありません。

しかし、私は、赴任前から、カンボジアにいる間に全ての州を訪ねてみよう、密かに企んでいました。せっかくカンボジアに来たのに、プノンペンしか知らないのでは、もったいないですから。

そんな思いをひた隠しながら（？）、カンボジア全土の裁判所を訪問して現地の実情を調査するという企画を立てたわけですが、幸いなことに、その企画を実現することができました。これからお伝えする内容は、この全国の裁判所を訪問して現地調査をしたときに体験したことが中心です。

各地の裁判所では、多くの裁判官と会って、裁判所に関する基本的な情報を教えてもらったり、実務上の問題点を聞いたりしました。この現地調査で得た法的な情報について

ては、別稿¹に譲りますので、ここでは、別の視点から現地調査の様子をご紹介します。

カンボジアには、全部で24州と1都があります。国土の広さは、日本の約半分です。しかし、新幹線のような高速鉄道はありません。最近では、プノンペンと地方都市とをつなぐ鉄道が何路線か開通しましたが、まだまだ長距離移動の定番手段とは言えません。ですから、基本的な移動手段は、車です。

そのため、私たちも小型のバンを手配し、毎日5～6時間ほど車に揺られて、各地を転々と移動しました。1回当たりの日程は3泊4日くらいで、約2か月間をかけて各地を巡りました。結果的に、私は、日本の全都道府県よりも先に、カンボジアの全州を制覇してしまいました。

これだけ聞くと、何だか楽しい旅行の繰り返しのように思われるかもしれませんが、道中は、なかなかハードなのです。

最初は物珍しい田園風景も、数時間続くと睡魔を呼びます。うたた寝をして、ふと目を覚ましても、既視感に見舞われるような風景が続き、目的地まではまだまだ道半ば。移動途中の休憩はガソリンスタンドでのトイレ休憩くらいですが、トイレでは、虫が飛び交い、ずいぶん前から溜められているように見える桶の水で手を洗うことがあるなど、お世辞にも衛生的とは言えません。

セミナーやワーキング・グループに出席するため、各州から首都プノンペンまで出張してくる人もいるのですが、今回、その大変さを身をもって知りました。プノンペンまでは、最も遠い州都からだと、車で片道約8時間半。多くの州都からでも、約5時間です。ですから、一往復するだけでも、シリーズ物のハリウッド映画を全編見ることができそうです。

さて、やっとの思いでたどり着いた目的地でも、安心はできません。各地での宿泊先は、カンボジアの地方都市では平均的な価格、1泊15ドル程度のホテル（ゲストハウス？）です。

部屋選びは、温水シャワーがあるどうかを確かめるところから始まりますが（！）、トイレットペーパーがないなどは序の口です。室内の照明が壊れている、シャワーの水圧が低い、排水口が詰まっている、室内が臭い、室内に虫が住んでいる、ベッドに寝転がるとシーツに触れた肌がむず痒くなるなど、様々なバリエーションで私たちを驚かせてくれました。日本のホテルならクレーム殺到ですが、「所変われば」というべきでしょうか、ホテルのスタッフに伝えても、「何で気になるの？」と言わんばかりの顔です。

もちろん、日本円で1泊1500～1600円ですから、贅沢は言えませんが、もう少し「健康で文化的な最低限度の生活」を営めるホテル環境を希望したいところです。

¹ 「カンボジアの司法～始審裁判所～」(『ICDNEWS』2017年12月号)を参照。

さあ、宿が決まれば、気を取りなおして、空腹を満たしましょう。各地での楽しみと言えば、「食事」を挙げる人がいるかもしれません。

カンボジアでも、各地にはローカル食堂がありますが、シェムリアップのような国際観光都市を除けば、日本食はおろか、欧米の料理を提供するお店も見当たりません。でも、ローカル食堂のクメール料理は、素朴な味ですが、意外とクセになるおいしさです。

もともと、衛生的にはかなり疑問が残りますが、どうやら私の胃腸は繊細にできていないようで、整腸剤に助けを求めることはありませんでした。

もう1つの楽しみとして「観光」を挙げる人がいるかもしれません。

私たちは、あくまでも仕事での訪問ですから「観光」はしませんでした。次の州へ移動するときの空き時間を利用して、各地の特徴的な場所（「観光名所」とも呼びますが…）を「現地視察」しました。記念写真ではなく、「現場写真」でその様子を少しご紹介します。



【プレア・ヴィヒア寺院遺跡からの眺め】

この寺院は、カンボジア北部のプレア・ヴィヒア州にあり、タイと国境を接しています。早速、法律的な話をすると、この寺院については、タイとの間で領有権問題がありました。1962年、国際司法裁判所によって、カンボジアの領有権が認められましたが、2008年、カンボジアで2番目の世界遺産に登録されると、寺院周辺でタイとカンボジアの軍隊が銃撃戦を繰り返すなどして、多くの死傷者を出しました。

今でも、カンボジアの軍関係者が寺院内に常駐して、タイ側を監視しています。そんな緊迫感をよそに、眼下には、カンボジア国土の大半を占める広大で美しい平原が広がっています。



【サンボー・プレイ・クック遺跡】

この遺跡は、カンボジア中部のコンポン・トム州にあり、つい最近、2017年に、カンボジアで3番目の世界遺産に登録されました。アンコール・ワット遺跡よりも古い時代のものと言われています。

私たちが訪れたときは、まだ登録前でしたので、観光客はほとんどおらず、のんびりとした時間が流れていました。しかし、登録後は、多くの観光客が訪れて賑わっているとのこと。「世界遺産」ブランドは効果絶大です。遺跡に宿る神々にとっては、一夜にして有名になってしまったわけですが、急増した訪問者を見て何を思うのでしょうか。



【シェムリアップのパブ・ストリート】

日本でも有名なアンコール・ワット遺跡群は、カンボジア中部のシェムリアップ州にあります。1992年、カンボジアで最初の世界遺産に登録されました。歴史を物語る石造りの巨大寺院遺跡は、カンボジアを象徴する建造物で、カンボジア国旗にも図柄が取り入れられています。

その一方で、遺跡から車でしばらく走ると、市内中心部の繁華街にたどり着きます。多くの外国人観光客がビールを片手にくつろげる（騒げる？）「パブ・ストリート」などが有名です。世俗と神秘が共存する街です。



【ベトナム国境の街・バベット】



【タイ国境の街・ポイペト】

カンボジアは、タイやベトナムなどと国境を接していますが、幹線道路が国境を越える地域では、独特の街並みができあがっています。

例えば、ベトナム国境のバベット、タイ国境のポイペトなどは、その典型です。

どちらの街にもカジノが立ち並び、外国人しか入店できないことになっています（実際には、カンボジア人を店内で見掛けますが…）。また、多くの人が日常的に国境を越えて買出しに出かけ、大きなコンテナを積んだトラックも所狭しと行き交っています。ここに立つと、陸路貿易の要衝だということを実感します。海に囲まれた日本に住んでいた私にとっては、とても興味深い光景でした。

ところで、更に興味深いのは、通貨です。

私は、飲み物を買おうと思ってポイペトの街中にあるコンビニに立ち寄ったのですが、レジでは、ドルかバーツ（隣国タイの通貨）しか使えず、リエル（カンボジアの通貨）での支払いを拒まれてしまいました。カンボジア国内なのに自国の通貨が通用しないというのは、何とも不思議な体験でした。



【ストウン・トラエン州の瀑布】

国境といえば、カンボジアは、北部でラオスとも接しています。東南アジアを縦断する大河メコン川がラオス国境で瀑布となっていて、圧倒的な水量と音量で、見る者を魅了します。カンボジアの知られざる一面かもしれません。この豊かな自然を残しておきたいところですが、すでに周辺地域のリゾート開発が始まりつつあります。「投資にご興味がある方は、ぜひ私にご一報を。」という悪魔の誘惑に駆られてしまいそうなくらい風光明媚な場所です。



【プノンペン市内の高層ビル】



【高層ビルからのプノンペン市内の眺め】

首都プノンペンでは、マンションや商業ビルなどの高層ビルが高さを競うかのように林立していますが、これは、カンボジアの本当に極めて限られた一面です。写真でご覧いただいたように、カンボジアには様々な風景があります。

また、写真では紹介しきれませんでした。この他にも、カンボジアには、「これぞカンボジア！」と私が勝手に思っている印象的な景色が数多くあります。

「砂煙が立ち上がる赤土の直線道路」

「透き通った波が打ち寄せる白い砂浜」

「背の高いサトウヤシが点在する田園地帯」

などなどです。郷愁に浸る懐古趣味があるわけではありませんが、見ていると純粹に美しいと感じます。

さて、長々とガイドブックのような説明をしてきましたが、いかがだったでしょうか？
カンボジアへ旅行したくなりましたか？

…とお尋ねしたいわけではなく、各地を訪問するといっても、日本とはかなり様子が違うことをお伝えしたかったのですが、実感していただけたでしょうか？

もちろん、日本と様子が違うのは、道中や街並みだけではありません。

私たちは、各州に1つずつある始審裁判所（日本でいう地方裁判所に相当します。）を訪問しました。訪問先では、裁判所の所長を始めとして、裁判官や検察官、書記官の方々などが総出で出迎えてくれて、私たちの様々な質問にも快く答えてくれました。

さらに、法廷などの施設も見せてくれましたが、少し驚いたのは、「会議室」です。

予算や建物の大きさなどの都合で、会議室がない裁判所も多いのです。そのため、法廷の机やいすを移動させて、急遽、「会議室」に模様替えしてくれました。日本とは違って、いすが固定式ではないためにできる荒業ですが、「法廷は厳粛なもの」という固定観念に囚われている私にとっては、天動説が地動説になるくらいのコペルニクスの転回が必要な瞬間でした。

各地の裁判所の皆さんは、日本の法律家がめったに来ない（初めて来た？）からなのか、私たちの質問に答えるだけでは物足りないようで、逆に、裁判官からいろいろと質問が飛び出しました。コペルニクスでも予想できないような方向から「ボール」が飛んでくるので、イチロー並みの守備力が必要です。

延長戦を避けるべく、「そろそろ、次の州へ移動しなければいけないので…。」と方便を使い（？）、やっと質問攻めから解放される…いや、質問に答えないのに後ろ髪を引かれる思いで、裁判所を去ることもしばしば。

とはいえ、裁判所で話を聞けば聞くほど、（日本では当たり前前提となっているインフラが十分に整備されていないことなどもあって）法的な問題以前の苦勞が多いことも分かりました。

各州内では公共交通機関がほとんど発達していないので、裁判所職員が書類を当事者に届けるのに一苦勞。

雨季になると未舗装の道はぬかるむので、当事者も裁判所職員も移動するのに一苦勞。

多くの州では弁護士がほとんどいないので、当事者は訴状を作るのに一苦勞。

裁判所は各州の州都に1か所しかないので、当事者は裁判所に行くのに一苦勞。

…挙げ始めたらきりがないくらいの「一苦勞」の数々です。

各地の様子は、事前にある程度聞いていたのですが、寄せ集めの情報で構成していた

私のイメージと比べて、実際の様子は、ずいぶんと異なっていました。正に「百聞は一見に如かず」です。

各地を訪問する現地調査は、「宝の山」の発掘作業に近いかもしれませんが。何が埋まっているのか分からないけれども、とにかく掘り始めてみれば、思いもよらない「原石」に巡り会えます。誰も知らなかった情報や初めての体験といった「原石」をしっかりと磨き上げれば、プロジェクト活動にとっての「宝石」を手に入れることができます。プロジェクト・オフィスには、そんなたくさんの「宝石」が保管されています。

もっとも、この「宝石」は、非売品ですので、現地専門家が一獲千金の夢を見ることは難しそうです。

国外に行く

あまり機会は多くありませんが、現地専門家は、カンボジア国外へ出張することもあります。

日本を知るには、日本の「外から眺める」とよく分かる場合がありますが、カンボジアも同じだと思います。他の国々の様子を知れば、それをカンボジアに反映させることができます。気付かなかった視点、他国での模範例（グッド・プラクティス）を活用すれば、よりよいプロジェクトになるはずです。

実際、隣国ベトナムに各国の現地専門家が集まり、それぞれのプロジェクトについての情報を持ち寄って話し合う機会がありました。どこの国のプロジェクトでも同じ悩みを抱えているんだなあとと思うような「法整備支援あるある」から、画期的で興味深い取組まで、多種多様な話題に花が咲きました。

この他にも、国外出張としては、「本邦研修」があります。これは、プロジェクトのワーキング・グループに所属するメンバーが、約2週間、日本に行って、日本の実務などを実際に見聞きして学ぶという研修ですが²、担当の現地専門家も同行します。

私は、この赴任中には本邦研修に同行していませんが、ICD教官だった頃に、本邦研修を受け入れる日本側の担当をしていました。メンバーは、お互いに熱心に議論したり、訪問先で次々と質問したりして、カンボジアを「外から眺める」ことで様々なヒントを持ち帰っていきました。

法整備支援の魅力の1つは、当たり前だと思っていた自分の世界を「外から眺める」ことによって、その世界の良さも悪さも再発見できることかもしれません。

さて、2回にわたって、「特別な平日」をお伝えしましたが、いかがだったでしょうか？今回は、「平日」というよりも「休日」ではないかというお叱りの声が聞こえてきそうですが、特別な平日の雰囲気但至少でも堪能していただけたとしたら、うれしい限りです。

² 本邦研修については、『ICDNEWS』バックナンバーを参照。デジタル版は、ICDホームページに掲載。http://www.moj.go.jp/housouken/housou_houkoku_cambo.html

今回は、いよいよ最終回です。番外編として、私たちの本当の(?) 休日を「プノンペン
の休日」と題してお伝えします。

どうぞお楽しみに。

(つづく)

プノンペンの平日（5） ～カンボジア法整備支援の日常～

JICA長期派遣専門家

内山 淳

【目次】

- 1 平日の朝
- 2 平日の午前
- 3 平日の昼休み（以上，2017年12月号）
- 4 平日の午後
- 5 平日の夜（以上，2018年3月号）
- 6 平日の特別行事
 - (1) プノンペンにて（以上，2018年6月号）
 - (2) プノンペンを離れて（以上，2018年9月号）
- 7 番外編「プノンペンの休日」（以上，本号）

前回までは、様々な「平日」をお伝えしました。今回は、「休日」の様子です。オフィスでの仕事は、日本と似ているところも多いですが、オフィスを一歩出ると、そこは異国の日常です。異文化での生活には、驚き、喜び、苛立ちが欠かせませんが、これも法整備支援の日常です。品位を損なわない限度で、私の休日をご紹介します。

7 番外編「プノンペンの休日」

運動する

カンボジアに住み始めて痛感するのは、運動不足です。

決して日本で健康的な生活をしていただけではありませんが、日本での仕事を思い返してみると、意外と歩く機会が多いことに気付きました。通勤の往復、広い庁舎内の移動など、1回当たりの移動距離は大したことないですが、「塵も積もれば」何とやらです。しかし、カンボジアでは、歩道が整備されていない上、移動には車やトゥクトゥクを使います。しかも、私の通勤は片道わずか5分ですし、オフィス内で歩き回る用務もありません。そのため、圧倒的に歩く機会が少なく、「塵が積もらない」のです。

そんな運動不足を解消すべく、休日には、体を動かしています。日本では、我が子と土日に公園で遊ぶ程度の運動量でしたが、カンボジアでは、学校のグラウンドでソフトボールやタッチラグビーをしたり、ホテルのプールで泳いだりしています。毎日というわけにはいきませんが、せめて毎週末くらいは、スポーツで汗を流そうと試みています。汗だけでなく、「穢れ」も流れ出ているようで、身も心も清らかになっている気がします。



【タッチラグビーでボールと戯れる】

飲食する

運動した後は、のどを潤すことになるわけですが、カンボジアでアルコール飲料と言えば、ビールが主流です。人気銘柄は、「アンコール」「カンボジア」といった割とベタなネーミングです。日本のビールと比べると、味が薄いかもしれませんが、一年中暑いカンボジアでは、これくらいがちょうどいい気がします。中ジョッキ1杯で1～2ドル。ハッピー・アワーと称するお得な時間帯を設定しているお店では、3000リエル（75セント）と格安です。

ちなみに、ちょっと深酒した翌朝は、ココナッツ・ジュースがオススメです。通勤途中に、路肩の売り子さんから手軽に買えます。新鮮で大きなココナッツをその場で割ってもらい、ストローを挿せば出来上がり。こちらは、ハッピー・アワーがありませんが、いつでも3000リエル（75セント）とやはり格安です。



【ココナッツ・ジュースの売り子さん】

さて、のどを潤したら、お腹を満たしたくなります。カンボジアで有名な食材と言えば、ドリアン（カンポット州）、コーヒー（モンドルキリ州）、カニ（ケップ州）、胡椒（カンポット州）などです。

ドリアンと言えば、あの独特な芳香（異臭？）で有名ですが、私がカンボジアに来てから好きになった食べ物の1つです。

ドリアンが臭いという話をすると、日本に詳しいカンボジア人は、納豆の方が臭いと反論してきます。この「ドリアン」VS「納豆」論争は、いまだ定説がないところですが、私は、「どちらも臭いが、美味しい」説を主張しています。



【果物店で山積みのドリアン】

ところで、クメール（カンボジア）料理と言うと、どんな食べ物を連想するでしょうか？ 東の隣国ベトナムなら「フォー」、西の隣国タイなら「トムヤムクン」などが有名ですが、クメール料理は、いまいち知名度が高くありません。しかし、知名度と味は、無関係です。

例えば、「ノンバンチョック」（野菜などを乗せた米麺に魚のスープをかけたもの）、「アモック」（白身魚をカレーペーストやココナッツミルクと一緒にバナナの葉で包んで蒸したもの）などは、誰にでも愛される味で、カンボジアの代表的な一品です。個人的には、スープもオススメです。味のバラエティーが豊富で、酸っぱくて少し甘いスープなどもあり、次第に病み付きになります。

東南アジア各国の料理といえば、「辛い」というイメージがあるかもしれませんが、クメール料理は、基本的に辛くありません。ただし、味は比較的濃いめです。そのためなのか、私が見る限り、白飯が食事の主役で、味の濃いおかずは白飯をたくさん食べるためのサポーターという「力関係」があるように感じます。私も、その力関係に抗えず、白飯の魅力に惹かれて、ついつい箸が進み、結局、食べ過ぎてしまいます。カンボジアで「糖質制限ダイエット」を実践するのは、なかなか難しそうです。

白飯を片手にクメール料理を眺めてみると、食材としては、川魚、鶏、野菜が多いように見えます。もっとも、ここは異国。日本ではなかなかお目にかかれない食材にも出会います。例えば、「亀」、「蛙」、「蟻」、「蛇」…どれも味は決して悪くないのですが、漢字で書くと、何だか食欲がなくなるのは気のせいでしょうか。



【レストラン版ノンバンチョック】

切る

短期の出張ではなく、長期の赴任となると、髪を切りたくなる時期が来ます。ですから、休日には美容室でサッパリして、イメージチェンジです。

首都プノンペンには、日系の美容室がいくつもあるので、数十ドルで、日本にいるときと同じ髪型になれます。他にも、街中を歩くと、道端に、数ドルで髪を切ってくれる「青空理髪店」があります。圧倒的な安さですが、私は、まだ利用する勇気がありません。

ちなみに、プノンペンには、日系の大型ショッピングモールが2店舗あるので、様々な日用品を手軽に入手できるのですが、髪に関して言えば、ヘアケア商品（ヘアトニックや育毛剤など）をあまり見かけません。私も「不惑」を越えて早数年。日射しが強く、汗をかきやすいこの国にいますと、どうしても頭髪を労わりたくなります。日本の皆様、この分野はビジネスチャンスです!?

教える

毎週土曜日の午前中には、日本人補習授業校¹(通称「補習校」)で、中学生に数学と社会をボランティアで教えています。

首都プノンペンには、日本から教員が派遣されている日本人学校もあります。しかし、インターナショナル・スクールに通っているお子さんや、御両親のどちらかがカンボジア国籍というお子さんもいますので、週末などに日本語で教育を受ける機会がほしいという要望があります。社会科の授業風に言えば、生徒の「需要」は多いわけです。しかし、補習校の教師はボランティアのみですので、常に人材募集中で、教師の「供給」には苦労しています。そんな事情もあって、私は補習校に関わるようになりました。

補習校の授業では、日本の教科書などを使いますので、金曜の夜になると、数学の教科書とにらめっこして、翌日の授業のイメージ作りをしています。

当日は、補習校までは車で片道約30分かかり、朝8時から職員会議がありますので、この「方程式」を解くと、「土曜の朝は平日よりも早起きが必要」という答えになります。

¹ ホームページ：<http://www.jacam.cc/ppjs/>, フェイスブック：<https://ja-jp.facebook.com/ppjskh/>

そのため、金曜の夜は、「禁・残業」「禁・飲み会」「禁・夜更し」です。

補習校のおかげで、とても知的で健康的な週末を送っています。

乗る

休日に限りませんが、プノンペンの街中を移動するときには、トゥクトゥクに乗ることがあります。風を感じながら移動できるので心地よいのですが、朝夕は、通勤の車やバイクが多いため、排気ガスとの闘いが必要です。

トゥクトゥクに乗るためには、事前に目的地を伝えて、運転手さんと値段交渉をします。相場としては、近い所までなら、2～3ドル、ちょっと距離があっても4～5ドル程度です。人数が増えると、燃費が悪くなるからなのか、若干、割増運賃になる傾向です。

そして、この運転手さんとの交渉は、クメール語を座学中心で学んだ身にとって、貴重な実地訓練(?)の場になります。

私 「こんにちは、〇〇まで行ってください。」(にこやかに)

運転手「どこ？」

私 「△△の近くですよ。」(土地勘がある人のように)

運転手「あー、分かった。じゃあ、4ドル。」

私 「高いよー。普通なら2ドルでしょ？」(大げさに)

運転手「じゃあ、3ドルでどう？」

私 「2ドル半！」(懇願しながら)

運転手「いや、3ドル。」

私 「ん～、高いな…やめておくよ。バイバイ。」(残念そうに)

と言って、立ち去るふり(!)をすると、

運転手「分かった、分かった。2ドル半でいいよ。乗って。」

私 「ありがとう！」(満面の笑顔で)

こんな具合で、無事、実地訓練を修了。

でも、油断はできません。運転手さんは、「あー、分かった。」と言ったのにいきなり違う方向に発進し出すこともしばしば。「あっちの方向に行って。」「そこを右に曲がって。」などと言いながら、引き続き、クメール語の実地訓練が続きます。

そんなトゥクトゥクですが、最近では、試練が訪れているようです。運転手さんからは、客離れの愚痴をよく聞きます。ここ1年くらいのことですが、「Rickshaw (リキショー、リキシャ)」²と呼ばれる小型の乗り物が席卷しているからです。

これに乗るためには、スマートフォンのアプリを使う必要がありますが、自分のいる場所まで来てくれますので、トゥクトゥクを探し回る必要はありません。また、目的地を入力できるので、行き先をクメール語で説明する必要もありません。さらに、距離などに応

² 日本の「人力車」が語源。インドを始めとするアジア諸国で利用されている乗り物。前掲写真「ココナッツ・ジュースの売り子さん」の左上方に小さく写っている。詳しくは、https://en.wikipedia.org/wiki/Auto_rickshaw等を参照。

じて値段が自動的に計算され、降りる時にスマートフォンの画面に料金が表示されますので、事前に価格交渉をする必要もありません。そして何よりも、値段がトゥクトゥクの半額くらいと格安なのです。ですから、クメール語や料金相場を知らない外国人旅行者にはメリットが大きいので、あつという間に広まりました。

そんな逆風の中でも、常連のトゥクトゥクの運転手さんの「サン」は、妻と幼い2人の子供のため、毎日、王宮の前で見学を終えた観光客に声を掛けて、お客さんの確保に奔走しています。節約のため、昼ご飯は手作りのシンプルな弁当で、安全運転のため、お酒は飲みません。そんな姿を見ていると、ついついスマートフォンのアプリを起動させる指も躊躇して、できるだけ「サン」のトゥクトゥクを利用したくなってしまいます。



【常連のトゥクトゥクの運転手「サン」】

過ごす

プノンペンでの休日をゆったりと過ごすには、カフェが最適です。旧宗主国がフランスであったことが影響しているのか、街中にはコーヒー・ショップが乱立しています。シアトルに本社がある世界的ブランド店もあれば、カンボジア発祥の人気店もあります。どの店も個性を出してそれぞれの違いを競っているようですが、どの店にも共通することがあります。

それは、「店内に長居していても、追い出されないこと」です。

空いてもいないグラスに何度も水を注ぎに来たり、汚れてもいないテーブルを何度も拭きに来たりする店員はいません。ボーっとするもよし、読書するもよし、人間観察するもよし。とにかく気兼ねなく、のんびりと過ごせます。

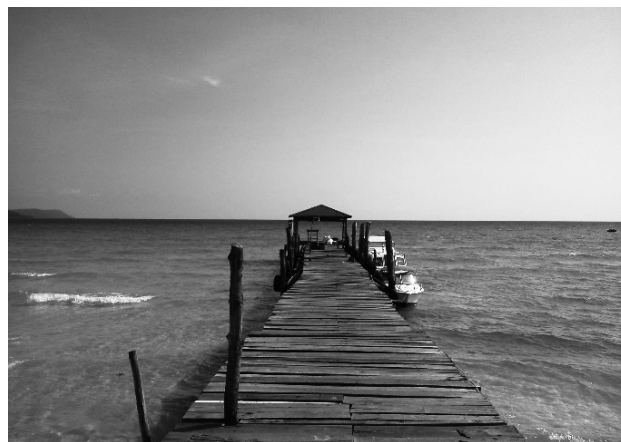


【丘陵地帯にあるコーヒー園】

もっとのんびりするため、プノンペンを離れて休日をゆったりと過ごすには、離島が最適です。

カンボジアは海岸線が比較的短いので、「海」のイメージがないかもしれませんが、シハヌークビル州、コッコン州などには魅力的な海のリゾート地があります。プライベートで行った離島（ロン島）の海は、想像をはるかに超えた美しさでした。カラー写真でお見せできないのが残念ですが、海水は、ミネラルウォーター並みの透明度です。

波に身を委ねて海面に浮んだまま目を開くと、透き通った青空しか見えません。そのまま目を閉じると、澄んだ水音しか聞こえません。「楽園」「至福」という言葉がぴったりです。もうプノンペンの平日には戻れそうにありません。



【ロン島の栈橋】

さて、今回は、私たちの「休日」をお伝えしましたが、いかがだったでしょうか？

まだまだお伝えしたいことがあるので、プノンペンの「三連休」と題して続編を検討したいところですが、紙幅と自主規制の都合上、割愛させていただきます。

法整備支援の現場は、必ずしも順風満帆とは限りません。ですから、「気分転換は、明日への活力！」「笑顔は、最高の栄養！」と大げさな言葉で自分自身に言い聞かせながら、充実した休日を過ごすようにしています。

約1年にわたり、様々な姿をさらしてしまいましたが、法整備支援の日常に興味を持っていただけとしたら、長期派遣専門家冥利に尽きます。

おわりに

あと半年足らずで、私も日本に帰国し、おそらく検察の現場に戻ることになるでしょう。残念ですが、プノンペンともお別れです。

駄文『プノンペンの平日』を最後までお読みいただき、本当にありがとうございました。

名作『ローマの休日』のエンディングでは、各国を歴訪中の王女様は、ローマを去るときの記者会見で、どこの国が一番良かったですかと記者に尋ねられます。「いずれもそれ

ぞれ忘れ難く…」と用意されたとおりの答えを言い始めますが、突然、「ローマです！何と言ってもローマです！生涯忘れることはないでしょう。」³と力強く言い、叶わぬ恋の相手にしか分からない言い回しで、心の内に秘めた想いを伝えます。

私も、検事として各地を異動する中で、いずこもそれぞれ忘れ難いのですが、このカンボジアを生涯忘れることはないでしょう。

えっ？ 私の「叶わぬ恋の相手」ですか？

それは…。

もちろん「法整備支援」です！

(完)

³ Rome! By all means Rome! I will cherish my visit here in memory, as long as I live.